

【旧約聖書日課】イザヤ書 8章23節～9章3節

8²³ (今、苦悩の中にある人々には逃れるすべがない。)

先に

ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが

後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた

異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。

9¹闇の中を歩む民は、大いなる光を見

死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

2 あなたは深い喜びと

大きな楽しみをお与えになり

人々は御前に喜び祝った。

刈り入れの時を祝うように

戦利品を分け合って楽しむように。

3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を

あなたはミディアンの日のように

折ってくださった。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 1章8～17節

8まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることでありますが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、10何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。11あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。

12あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。13兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。

14わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

16わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

【福音書日課】マタイによる福音書 4章12～17節

12 イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。¹³そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。¹⁴それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、
湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、
異邦人のガリラヤ、

16 暗闇に住む民は大きな光を見、
死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

17 そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、
宣べ伝え始められた。

「天の国は近づいた」【こども説教のために】

昨年7月から「CS礼拝」も合流した二部制の「主日礼拝」になってから、「こどもの教会」分級に参加するこどもや奉仕者は、「こども説教」までで退堂するようになりました。とても残念なことですが、その人たちは、一緒に「主の祈り」を唱えないまま礼拝を終えることになってしまっています。

「主の祈り」は、主イエスが弟子たちに口伝てにお教えくださった祈りの言葉です。弟子たちが「わたしたちにも祈りを教えてください」（ルカ 11:1）と主イエスに願ってお教えいただいたのです。どうも、「洗礼者ヨハネの」の弟子たちが決まった祈りの言葉を唱えていたのを知って、自分たちも皆で一緒に唱える祈りの言葉を持ちたいと考えたようです。主イエスは、弟子たちの願いに答えて、わたしたちが「主の祈り」と呼ぶ祈りの言葉を、お教えくださいました。そこで、弟子たちの教会では、「主の祈り」を覚えて共に唱えるようになることが、主イエスに従う弟子として歩み始める第一歩になったのです。

「主の祈り」は6つの短い祈りの言葉でできています。その中でも、日本語で一番短く書かれるのが「み国を来たせたまえ」です。「神の国が来ますように」という祈りです。もしかすると、「主の祈り」の中でもこの祈りの言葉は、特別なものかもしれません。なぜなら、主イエスが弟子たちを招いて教えを始められたとき、最初の教えの言葉が「**天の国は近づいた**（神の国は近づいた）」という言葉だったのです。

主イエスは、「**天の国は近づいた**」とお教えになられて、弟子たちをお招きになりました。そして、弟子たちにも、「**天の国は近づいた**」と宣べ伝えるように命じられました（マタイ 10:7）。「主の祈り」を唱えるとき、わたしたちも、「**天の国は近づいた**」との教えを共に宣べ伝えているのです。

「天の国は近い」

昨春に続く二度目の「緊急事態宣言」の下、多くの教会は、昨春のように「集まり」を休止にすることなく続けています。国によっては、感染者の拡大に伴って、罰則付きで教会の「集まり」を禁じるところもあるのです。キリスト教国と自認する国でそのような罰則付きの禁令が出されるというのは、驚きでもあります。それだけ影響が大きいと考えられているのでしょう。それでも、教会が「葬儀」を執り行うことは許されている、と報じられました。「葬儀」は、急を要する、教会が責任を負うべき営みなのだとこの共通理解があるのでしょう。

確かに、「葬儀」は教会の大切な営みです。「主日礼拝」が何らかの理由で執り行えないことがあっても、教会は信者や関係者の「葬儀」を営む責任があるのです。

かつて初任地教会で茶飲み話をしていた折に、信者の皆さんが、「教会は、葬儀にお金がかからないから良い。それに比べてお寺は…」と盛り上がったことがありました。地方の小さな教会でしたから、信者の皆さんの中には、古くからの付き合いでお寺の檀家の責任を負っている方もあったのです。実際、教会で葬儀を執り行った後、寺墓地に葬らせていただいた信者の方もありました。「教会で葬儀を行う」という選択肢があったことが、そのご家族にとっては経済的にも大きな助けになったことは事実だったのでしょう。

とは言え、教会の皆さんが地上の生涯を終えられたとき、教会で「葬儀」を執り行うことは、信者として選択可能なサービスの一つ、というだけのことではありません。一人の人が、初めから終わりまで「信仰によって生きる」者として人生を全うされるために、教会が引き受けるべき責任のある当然の営みなのです。

ただ、そうであっても、皆さんの中には、信者でありながら教会での葬儀を執り行われることなく葬られる方もあるでしょう。自分ではそのことを願いながら、ご家族の意向でそうならない場合もあるでしょう。ご自身の意向で、そうならない場合もあるでしょう。けれども、そうだとすると、皆さんは、「それでは信仰を全うできない」とか、「天国に行けない」などと心配なさらないでいただきたいのです。

何となれば、主イエスは、「天の国は近い」とお教えになられたのです。「天の国は、あなたの手の届くところにある」と言われたのです。「神の御業のなされる世界は、すぐそこにある」のです。ただ、わたしたちがそのことに気づかずにいるのです。知らずに過ごしてしまっているのです。「み国を来たらせたまえ」と祈り、立ち帰って神の御前に向き直りさえすれば、知ることができる。主イエスは、そうお教えくださったのです。

《ガリラヤ》で始める《天の国》

「悔い改めよ」と、主イエスは、真っ先にお告げになりました。それは、洗礼者ヨハネが告げたのと同じ宣教の言葉だったようです（マタイ 3:2）。けれども、主イエスは、そのことにこだわりを持たれませんでした。ご自身が独創的な教えをなさることよりも、大切なことは、人の為したことであってもそのままお用いになられることを良しとされたのです。

「悔い改めよ、天の国は近づいた」と、主イエスは、洗礼者ヨハネの宣教の言葉をそのまま引き継いで、お教えになりました。わたしたちの心の向きが「天の国の近さ」を受けとめられる方向に正されるために、洗礼者ヨハネが徹底して人々に問うた「悔い改め」を、ご自身も大切なこととしてお教えになられたのです。

「イエス・キリストが『悔い改めなさい』と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになった」という言葉で問題提起を始めたのは、16世紀の改革者 M.ルターでした。ルターの「全生涯の悔い改め」の教えは、人々の心をときに、自己の全否定や禁欲的な自己鍛錬に向かわせたと言われ、必ずしも肯定的に理解されてこなかったかもしれません。「正しい者」であろうとすればするほど、自分自身の犯してきた罪過や失敗を償うための出発点として、改悛を深めようとするところがあるからです。

けれども、主イエスが教え、ルターが徹底しようと考えた「悔い改め」は、わたしたちが日々の生活の中で犯した失敗を悔いて、「二度と失敗を犯すまい」と改悛の情を示すことなのでしょう。おそらく、違うのでしょうか。主イエスが求められた「悔い改め」は、何よりも「天の国が近い」ことに気づけるように心の向きを正すことだったはず。「天の国は、あなたの手の届くところにある」と、主イエスはご自身の生涯を通して、弟子たちに、わたしたちに、お教えになりました。「天の国」こそが、わたしたちの今生きる世界の本当のあり様なのだと、お教えくださったのです。

神が、わたしたちの生きる世界の中心に在られ、すべての者の幸いを望んでいてくださり、そうなるように繰り返し御手を伸べて導こうとしてくださっている。その幸いを、造られた子どもが神と心をつなぐ共についでに、共に造り上げていく働きに、御言葉を介して参与させようとしてくださっている。あなたも、その御業にあずかることが、許されている。

主イエスは、その教えを、ガリラヤのカファルナウムでお始めになりました。弟子たちの生活する家があり、働く場があるところです。祈りの家のあるユダヤの地ではなく、日々の生活のあるガリラヤの地で「天の国」の民として生きるようにと、主イエスは、わたしたちそれぞれの「ガリラヤ」においでくださっているのです。